出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 5 集

1995年3月

出 雲 市 教 育 委 員 会

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 5 集

1995年3月

出 雲 市 教 育 委 員 会

序

出雲市は、県下でも有数の埋蔵文化財が密集する地域として知られています。これらは、貴重な文化遺産として活用を図るとともに、将来にわたり保存していかなければなりません。

しかしながら、最近の宅地造成や道路敷設等による開発のために、貴重な文化財が少しずつ破壊され、失われていくのが現状であります。

出雲市では、平成元年から出雲市埋蔵文化財調査報告書を発刊し、今までに紹介できなかった埋蔵文化財のいくつかを記録として残してまいりました。今年度も、ここに第５集として発刊の運びとなりましたが、今後もさらに埋蔵文化財保護行政を推進するための一環として、刊行してまいりたいと考えています。

本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に、心よりお礼申し上げます。

平成７年３月

出雲市教育委員会

教育長　鐘　築　芳　信

例　　言

1．本書は、これまでに実施した調査等のうち、未報告のものの一部についてまとめたものであり、下記の機関により調査を実施した。

古志本郷遺跡 --------- 出雲市教育委員会

角 田 遺 跡 ---------川上　　稔、西尾　克己ほか

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。

古志本郷遺跡 --------- 平成６年（1994）２月７日～３月４日

角 田 遺 跡 ---------昭和45年（1970）11月18日～同11月20日

3．古志本郷遺跡の調査体制は、次のとおりである。

調査指導者　　角田　徳幸（島根県教育委員会文化課主事）

調　査　員　　川上　　稔（出雲市教育委員会文化・スポーツ課係長）

　　岸　　道三（出雲市教育委員会文化・スポーツ課主事）

事　務　局　　下垣　晴司（出雲市教育委員会文化・スポーツ課課長）

4．調査にあたっては、地元の方々から多大の協力を得た。

5．本書の編集は出雲市教育委員会が行ったが、執筆分担については、次のとおりである。

古志本郷遺跡　　岸　　道三

角 田 遺 跡　　川上　　稔、西尾　克己（島根県埋蔵文化財調査センター係長）

6．角田遺跡出土遺物の借用にあたっては、出雲高等学校に快諾いただいた。記して謝意を表します。

目　　次

古志本郷遺跡

1．位置と環境…… 1

2．調査に至る経緯…… 3

3．調査の概要…… 4

4．ま　と　め…… 9

図　　版

角田遺跡

1．位置と環境……15

2．調査に至る経緯……17

3．調査の概要……18

4．ま　と　め……24

図　　版

古志本郷遺跡

1.　位置と環境

出雲市古志地区は、出雲市街地から約２㎞南西に位置している。神戸川の左岸に広がる平野部とその南の丘陵部で構成され、地区の北側には旧国道が通り、道路に沿って細長い町並みが東西に形成されている。

沖積平野には、かつて神戸川によって形成された旧自然堤防があり、弥生時代中期頃より集落が引き続き営まれていたことが知られている。その中でも、古志本郷遺跡は、矢野遺跡、天神遺跡と並ぶ市内でも有数の大集落遺跡であり、昭和６２年に国庫補助事業として実施した遺跡範囲確認調査では、６本のトレンチを設け、土器のほか、竪穴住居跡と考えられる落ち込みや貝層の一部が確認されている。また、平成２年度に実施した古志公民館建設に伴う発掘調査でも、竪穴住居跡３棟を検出したほか、黒曜石、青めのう、水晶等の石材や擦り切りに使用したと考えられる石鋸も出土していることから、玉作が行われていた可能性も窺える。

第１回　古志本郷遺跡周辺の遺跡図

１.古志本郷遺跡　２.思案橋北遺跡　３.古志遺跡　４.古志本郷西遺跡　５.弘法寺参道付近遺跡
６.上組北遺跡　７.田畑遺跡　８.正蓮寺北遺跡　９.上組遺跡　10.下古志天満宮付近遺跡
11.極楽寺付近遺跡　12.阿弥陀寺西遺跡　13.多聞院北遺跡　14.知井宮多聞院遺跡　15.東原遺跡
16.観知寺付近遺跡　17.嘉儀遺跡　18.芦渡遺跡　19.宝塚古墳　20.妙蓮寺山古墳
21.浄土寺山城跡　22.放れ山遺跡　23.放れ山古墳　24.天神遺跡　25.高西遺跡　26.伝塩冶氏館跡
27.弓原遺跡　28.塩冶小学校付近遺跡

今回調査した畑地造成予定地は、遺跡の南東端にあり、神戸川左岸に広がる旧自然堤防脇から急に低くなった水田である。また、古志本郷遺跡の西方に広がる沖積平野には、同時期の遺跡として田畑遺跡がある。昭和63年に国庫補助事業として実施した遺跡範囲確認発掘調査によって、市内ではじめて明確な竪穴住居跡（弥生時代中期）が検出されたほか、石鋸、石鏃などの石製品や黒曜石、めのうなどが出土し、攻玉などの加工を行っていたことが明らかとなっている。さらに、平成５年、県道敷設予定地内における試掘調査によって、古志本郷西遺跡、上組北遺跡の存在が確認されており、神戸川左岸に広がる沖積平野には、古志本郷遺跡を中心としてかなり広範囲な集落を営んでいた可能性をも窺わせる。

その他、古志・神門地区には、知井宮多聞院遺跡・弘法寺参道付近遺跡・正蓮寺北遺跡・東原遺跡など９ヵ所で弥生土器が発見されており、今後、調査が進めば、神戸川左岸に広がる旧自然堤防上の遺跡の殆どが弥生時代に溯る可能性が強い。

古墳時代になると、弥生時代の遺跡に引き続いて生活が営まれるほか、平野部や山麓に古墳や横穴墓が築造される。沖積平野には、大梶古墳や宝塚古墳、天神原古墳などが築かれている。大梶古墳は、古志本郷遺跡の広がる範囲内にあり、横穴式石室からは金環が出土している。宝塚古墳は、横穴式石室が現在周囲の水田面より低いところにあるが、築造当時は旧自然堤防上にあったと考えられており、石室内に家形石棺をもつ古墳で、国指定史跡となっている。天神原古墳は、出雲高校の西にあったが、現在は消滅している。南の山麓には、持ち送りの特異な側壁をもち、石床３基を安置した放れ山古墳や、横穴式石室に家形石棺を置き、観音開きの石扉をもつ妙蓮寺山古墳がある。また、山腹に穴を穿ちその中に埋葬した井上横穴墓群や地蔵堂横穴墓群、小浜山横穴墓群などもある。

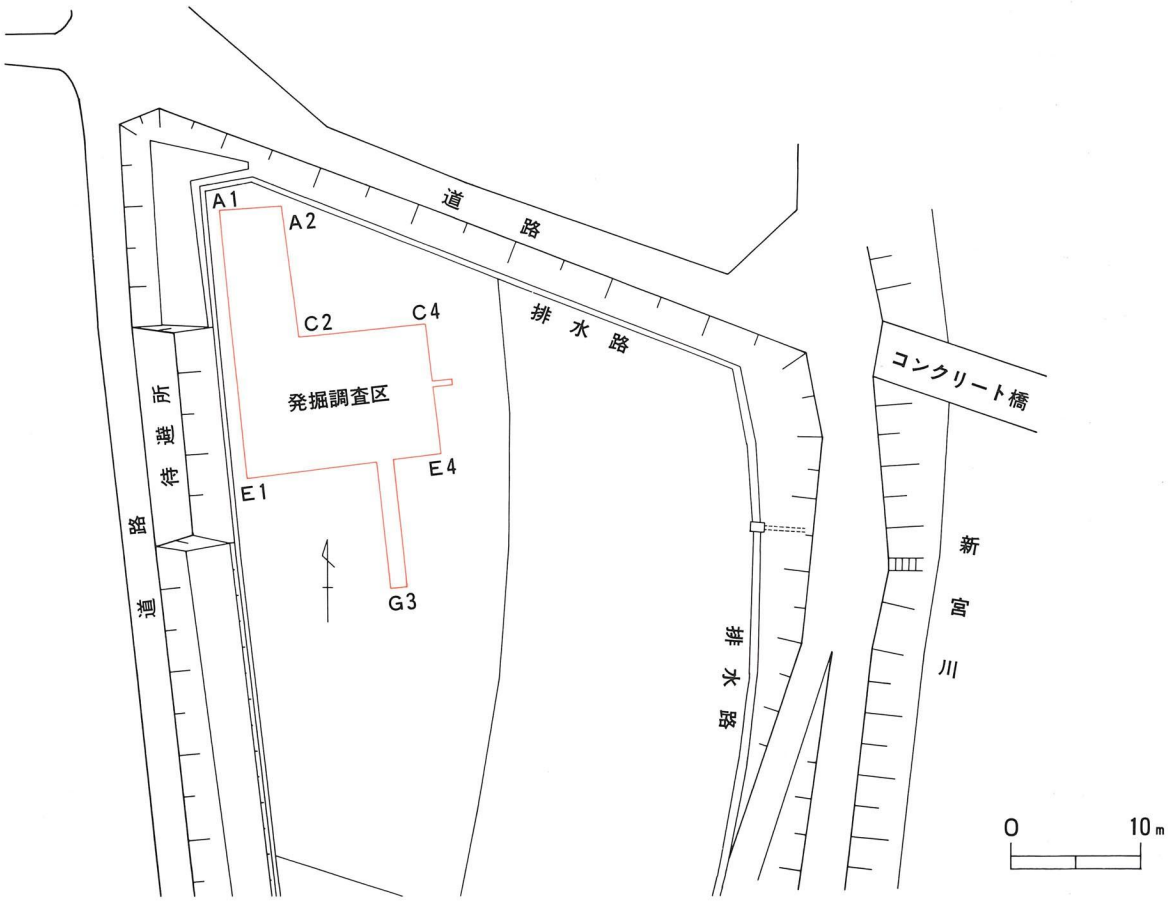
奈良時代には、これといった遺跡は見当たらないが、『出雲国風土記』に記載された「神門郡家」が弘法寺付近にあったとする説や、新造院が井上地区にあったとする説があるが、定かではない。また、「宇賀池」の堤跡と考えられる堤防が残っており、かつて観察できたその断面は、２種類の異なる土を交互に積み重ねた版築状互層になっており、大念寺古墳（出雲市今市町）等の古墳と同様に、高度な土木技術を用いて築堤されていたことが明らかになっている。

中世には、市内でも10余りの城館があるが、古志地区には、浄土寺山と栗栖山に山城が築かれる。これらは新宮谷沿いにあり、かつて南の山間部から平野に出る通路にあたる要衝の地を選んでいる。これらの城には、郭とよばれる平坦地が何段にもわたってつくられ、出雲守護職となった塩冶氏の、頼泰の弟、義信が古志氏として城主におさまり、永くこの地を治めている。神門地区には、保知石谷に、保知石氏の居城としての高城があるほか、比布智神社の小丘や智伊神社の小丘陵が城館として配置されている。

2. 調査に至る経緯

古志本郷遺跡の南東端にあたる当該地は、現状は水田であるが、農道拡幅に伴い用水路が廃止になるため、周辺の道路高まで盛土をし、畑地として利用することが計画されたものである。試掘調査を実施した結果、畑地造成予定地の最も北側にあたる水田から弥生時代以降の遺物が発見されたため、建設省出雲工事事務所、出雲市土地改良区、出雲市教育委員会が協議を行い、盛土の厚くなる部分について、事前に調査を実施することになった。

埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の２）は、水田の所有者である山根武久氏（出雲市古志町1,268）から平成６年１月24日に提出され、出雲市教育委員会がこれを受けて埋蔵文化財発掘調査の通知（同法98条の２）を１月28日付で文化庁長官宛通知した。発掘調査は、平成６年２月７日から同３月４日まで実施した。調査面積は、210㎡である。



第２図　調査区位置図

3. 調査の概要

発掘調査は、試掘調査の際、特に遺物が多く出土したトレンチ付近を中心として、南北にＡ～Ｅ、東西に１～４の５ｍ四方のグリッドを設定したのち、平成６年２月７日から発掘調査に着手した。

調査は、北側のグリッドから先に着手し、Ａ１、Ｂ１の水田耕土を掘り下げ、プランの確認作業から始めた。そして、必要に応じ、順次東及び南に調査を進めていった。

堆積土層

堆積土層は、調査区の北側では、水田耕土の下に青灰褐色土、暗褐色土があり、その下は地山の砂礫層になっている。浅いところでは砂礫層まで10cm～15cmで、特にＡ１、Ｂ１が地山面までが浅い。砂礫層以外のどの層にも遺物が包含しているが、出土量は少ない。

調査区の南側では、水田耕土の下に青灰褐色土、灰褐色土、明褐色土、暗褐色土、黄褐色土があり、その下は褐色砂礫層となっている。部分的に灰褐色土が落ち込んでいるが、これは、土地改良前の暗渠跡と考えられ、他にも古い時代と考えられる遺構は全くなかった。南側でも、褐色砂礫層以外のすべての層から遺物が出土しているが、特に明褐色土が安定した遺物包含層となっており、出土量も多い。しかし、明褐色土は、Ｄ１、Ｄ２、Ｄ３のほか、Ｃ１、Ｃ２、Ｃ３の南側半分に分布しているが、Ｃ４のサブトレンチとＥ３から南へ設定したトレンチによって、調査区以外にはほとんど広がっていないことがわかったので、遺物の散布は、今回調査した範囲外への広がりは少ないと考えられる。

遺物は、弥生時代～近世までの土器類のほか、土製品、鉄製品が出土しているが、各層とも時期の異なる遺物が混在しており、二次堆積のものであろう。地山となる褐色砂の上面では、Ａ１で10cm～15cmと浅く、Ｅ３付近で50cm～60cmとなっており、東及び南にいくにしたがって深くなっている。これは、調査区の西側には神戸川によって形成された旧自然堤防があり、そこには弥生時代から集落が営まれているので、その端部にあたる当該地に遺物が集積されたものと考えられる。

遺　物

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器などの土器類のほか、刀子、鉄鏃、耳環などの鉄製品、紡錘車、土錘などの土製品がある。それぞれ、遺物の概要は次の通りである。

１．土　器（第４図、第５図１～７）

出土した土器は、そのほとんどが細片であるうえ、遺構に伴うものではなく、時期的に新旧のものが混在した状況で出土している。ここでは、その中でも全体の形状が把握できるものについて取り上げることにした。

１は、口縁端部に２条の凹線文を入れ、口縁部が短く、断面が「く」の字状を呈する甕で、頸部には指頭で押さえ凹凸をつけて文様とした貼付突帯を有する。２は、口径17.8cmの甕で、口縁端部に４条の凹線文を入れ、外面胴上半部にはヨコ方向のハケメがわずかに残っている。３は、高坏の坏部であろう。内外面ともヨコ方向のハケメでやや粗雑に調整されており、内面は赤色塗彩されている。４は、下垂した口唇の外面及び口縁部の内側にクシ状工具によって斜格子文を施し、口縁部の内側には

円形浮文を有する壷で、弥生時代中期の特色を示している。５は、口径7.8cmを測る小型の壷で、内外面ともナナメ方向のハケメが僅かに残っており、全体的に丁寧な仕上がりである。６と７は土師器の甕で、６は、頸部に２条の凹線文を入れ、外面胴上半部はタテ方向のハケメ、内面は頸部より下にヘラケズリを施している。７は、外面胴上半部はナナメ方向の細やかなハケメ、内面は口縁部がヨコ方向のハケメ、頸部はナナメ方向のハケメにより調整されている。８は、土師器の坏、あるいは高坏で、外面は細やかなヨコ方向のハケメ、坏底部はタテ方向のハケメ、内面はヘラミガキによって調整されている。９は、甕の平底の底部で、内外面とも風化による剝離が著しいが、外面に僅かにヘラミガキ痕が残っている。

第５図１～５は高坏で、１は、外面の裾部付近にタテ方向のハケメ、坏部との接合部付近にもタテ方向のハケメが僅かに認められる。脚台部の内面は、はっきりとはしないがヨコ方向にヘラケズリが施されているようである。２は、脚台部のみであるが、外面は坏部との接合部付近でナナメ方向、裾部でヨコ方向のハケメによって調整され、内面は裾部上部に指頭圧痕が残り、下部はヨコ方向のハケメによって調整されている。３は、坏部で、外面は赤色塗彩されており、内面もヘラミガキ調整をした後、赤色塗彩されている。４は、接合部よりやや下方の脚台部で、外面上部では２条の凹線文の間に刺突文を施し、さらに刺突文の上から１条の沈線を施している。下部においても手法は同様であるが、凹線文が３条となっている。５は、径10cmを測る裾部であり、７条以上の凹線文の間に刺突具によって細やかな文様を施している。

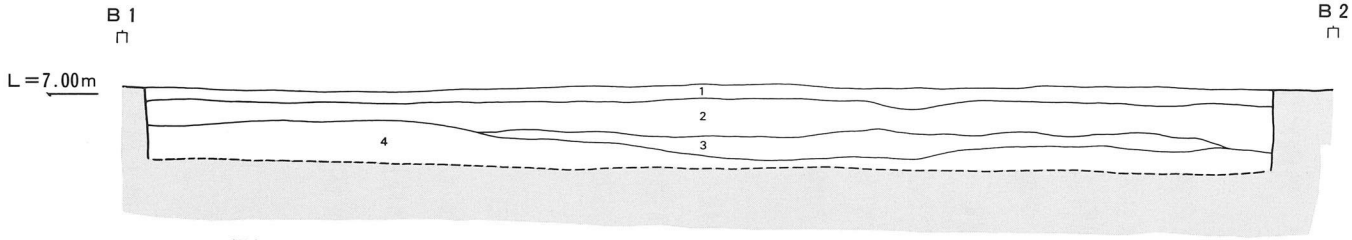
６、７は、須恵器の坏で、６は、体部がやや丸みを帯びて口縁端部がやや内傾し、底部には未調整の回転糸切り痕が残っている。７は、高台付の坏で、内面及び外面は丁寧なナデ調整が施されている。６、７は、山本清編年でいえばⅣ期、高広編年ではⅣＡ期の特徴を示すものである。

２．土製品　（第５図８～11）

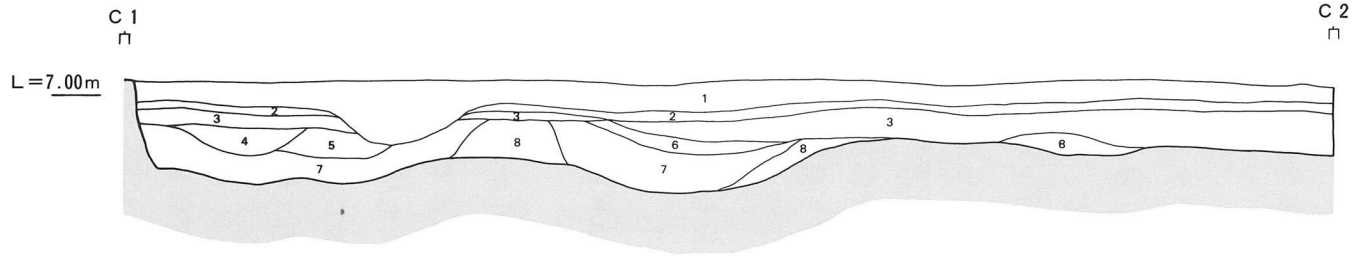
８は、把手であり、ヘラ磨き調整の後、赤色塗彩した部分が僅かに残っている。９は、指頭圧痕がいたるところに認められ、手捏で作られた粗雑なものであるが、使途は不明である。何かの重しのようなものかもしれない。10は、管状土錘で、全面に朱が塗られている。11は、半分が欠損しているが、直径4.8cmを測る紡錘車である。断面は台形状をなし、底部から立ち上がる部分は面取りが施されている。また、裏面には山形（星形？）文が線刻されている。

３．鉄製品　（第６図１～４）

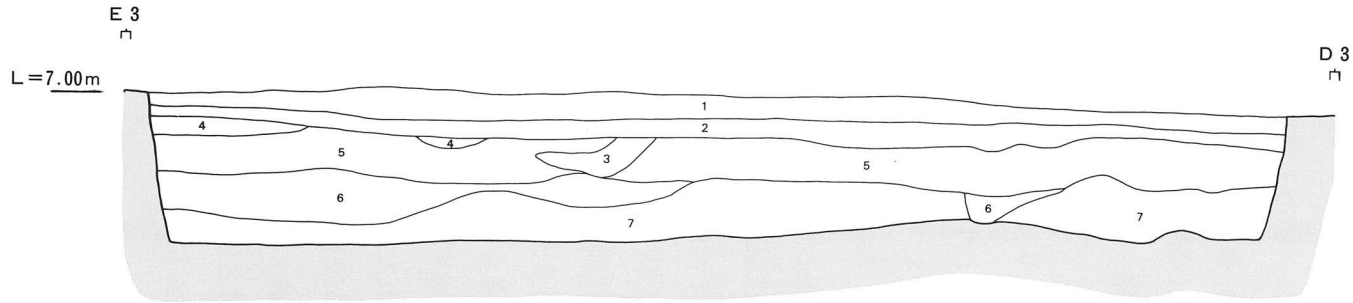
１は、耳環である。錆化が著しいうえにかなり変形しており、銅部分しか残っていないが、袂部が僅かに観察できる。２、４は、刀子の一部と考えられる。２は、現存長10cm、最大厚3.5㎜を測る。２、４ともに錆化は著しい。３は、先端に錐状の研ぎ出し部を有し、直径４㎜を測る鉄製品であるが、使途は不明である。現存の端部を観察するかぎり、芯棒があり、その先端部が研ぎ出されているようである。



1　褐色土
2　暗褐色土(青味をおびる)
3　暗褐色土
4　暗褐色土(砂質)

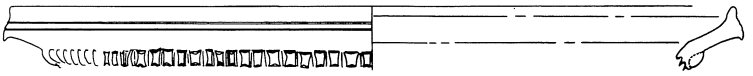


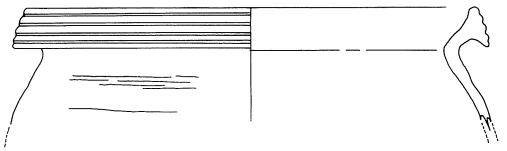
1　褐色土　　5　暗褐色土(粘質)
2　青灰褐色土　　6　暗褐色土(砂質)
3　暗褐色土　　7　暗褐色土(5層よりやや暗い)
4　灰褐色砂　　8　暗褐色土

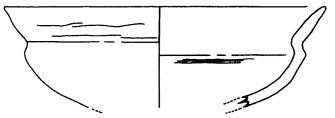


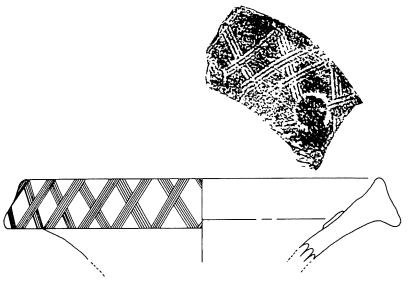
1　褐色土　　5　明褐色土
2　青灰褐色土　　6　暗褐色土
3　灰褐色土(撹乱)　　7　黄褐色土
4　灰褐色土

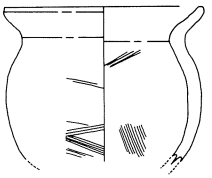
第3図　土層断面図

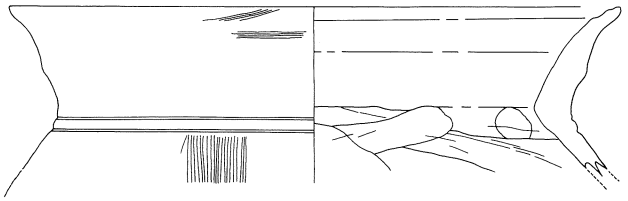

1

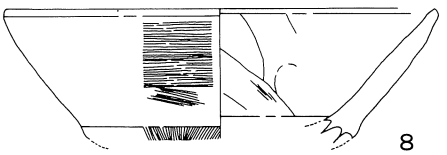

2

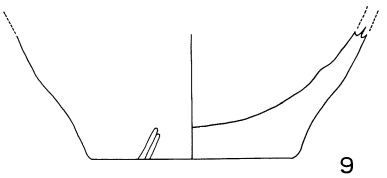

3

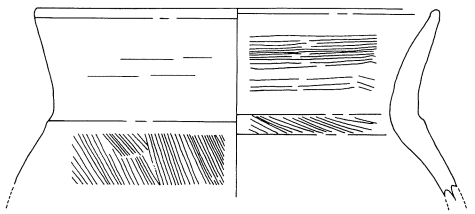

4

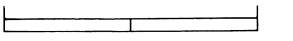

5


6

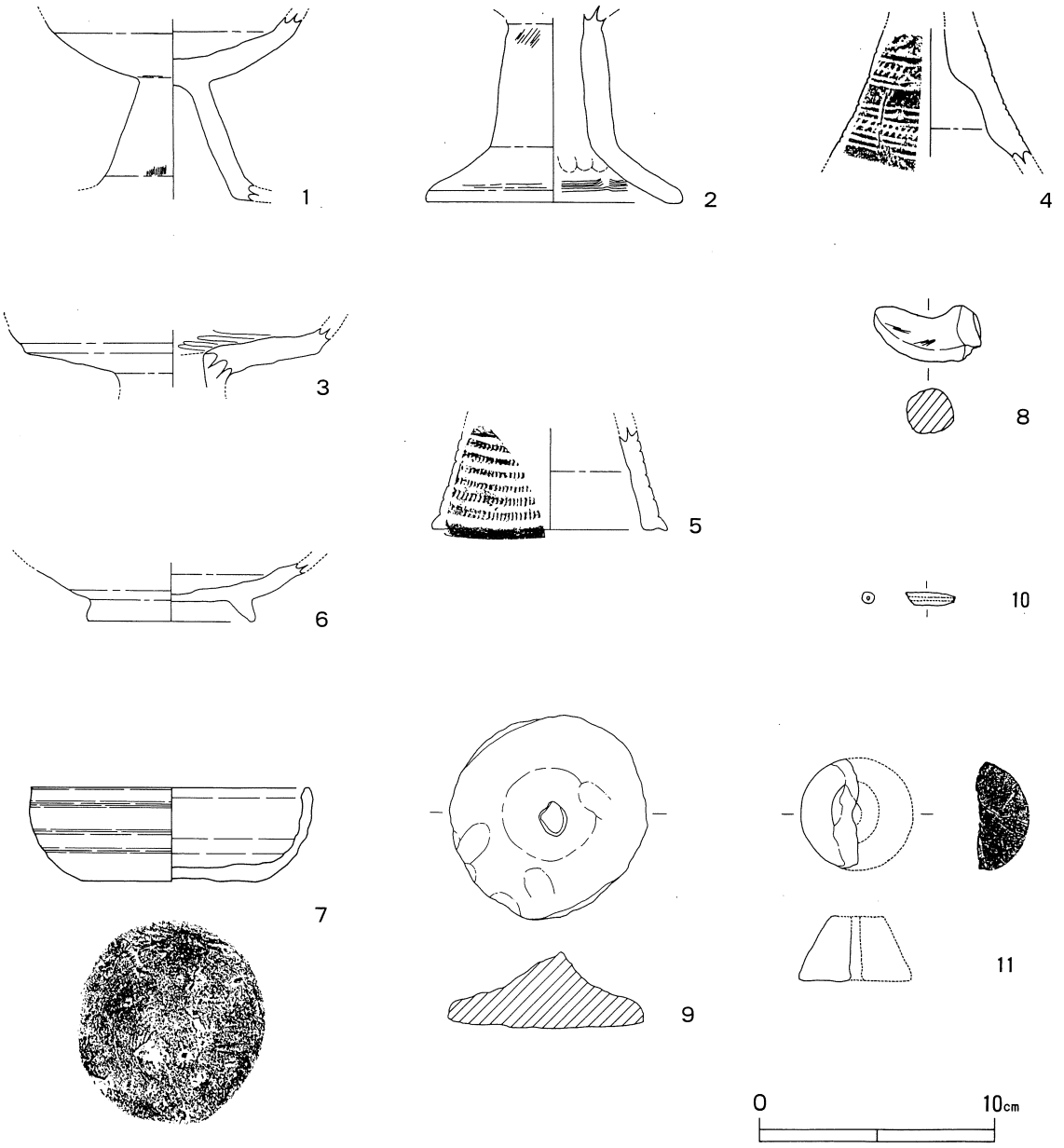

8


9

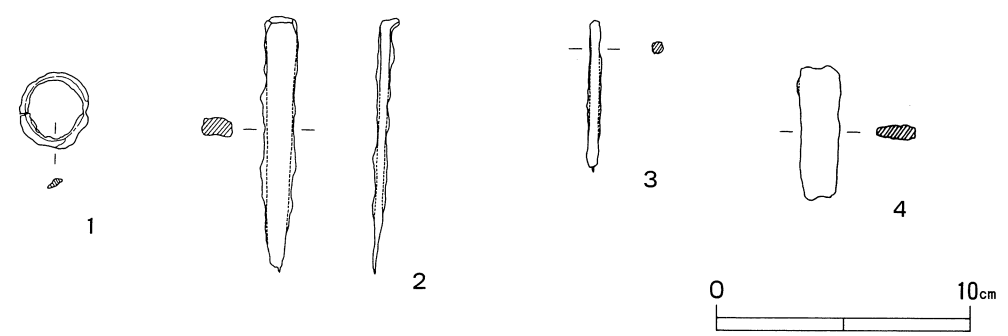

7



第4図　出土遺物実測図－1



第5図　出土遺物実測図－2



第6図　出土遺物実測図－3

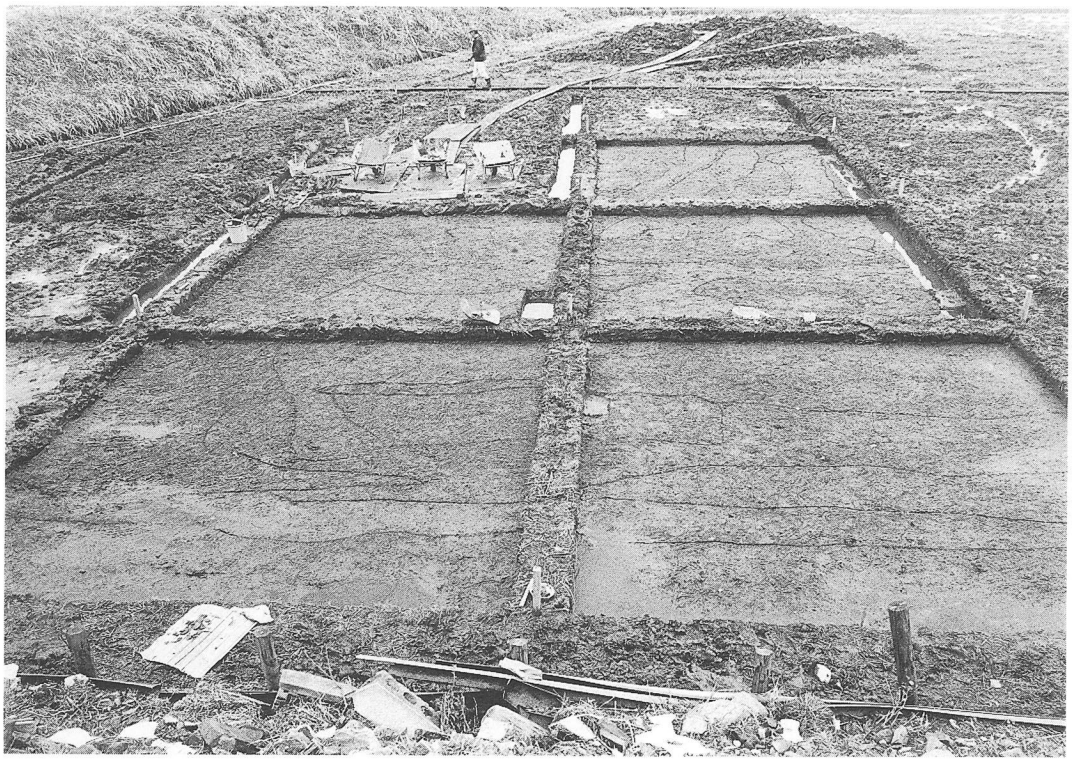
4. ま と め

古志本郷遺跡は、昭和62年の古志地区遺跡分布調査に伴う古志本郷遺跡範囲確認発掘調査、平成２年度の古志公民館建設に伴う発掘調査によって、遺跡の性格が概ね明らかになっており、弥生中期にまでさかのぼることが明らかになっている。今回の調査では、古い時代の遺構は全く検出されなかったが、弥生中期からの遺物がわずかながらも確認できたことは、当該地が古志本郷遺跡の端部にあたることを窺わせるものであった。このことは、平成５年度に当該地から新宮川を挟み東側で実施した試掘調査の際に、遺構や遺物が全くなかったことからも推測できることである。

今回の調査での成果は、遺物は少量であるが、その中には耳環をはじめとする鉄製品など、横穴墓や古墳に副葬される遺物が確認できたことである。古志村誌によれば、『神門塚、古志「上げ」の東南部で「井上」へ向かう道路ばたにあった。今は全く壊滅して居れども百五十年前には風土の高さ八尺周り二十八間もあった。そして塚頭に榎があり、神木と号して居た。而して今は無風土たるのみならず石さえも見当たらない。浄行寺南方の神田辰平方の庭に石棺の上部だけが露はれて居るがこの封土を崩して付近一帯に覆い畑地が出来たと云う。』といった記述がある。この記述は、今回調査した地点から西方約100ｍのところに、高さ2.4ｍ、周囲50ｍほどの古墳が存在し、江戸時代の末ごろにその封土を付近の畑地造成に使用したこと示しているものである。今回出土した鉄製品などは、この記述をに裏づけるには足りないものではあるが、その一端を窺わせるものではある。また、手捏の使途不明土製品や山形文を裏面に施した紡錘車などは、類例の少ない遺物であり、古志本郷遺跡の多様性が窺える。古志地区では、今後も圃場整備や道路敷設などに伴う発掘調査が計画されており、さらに遺跡の性格が明らかになっていくこととと考えられる。

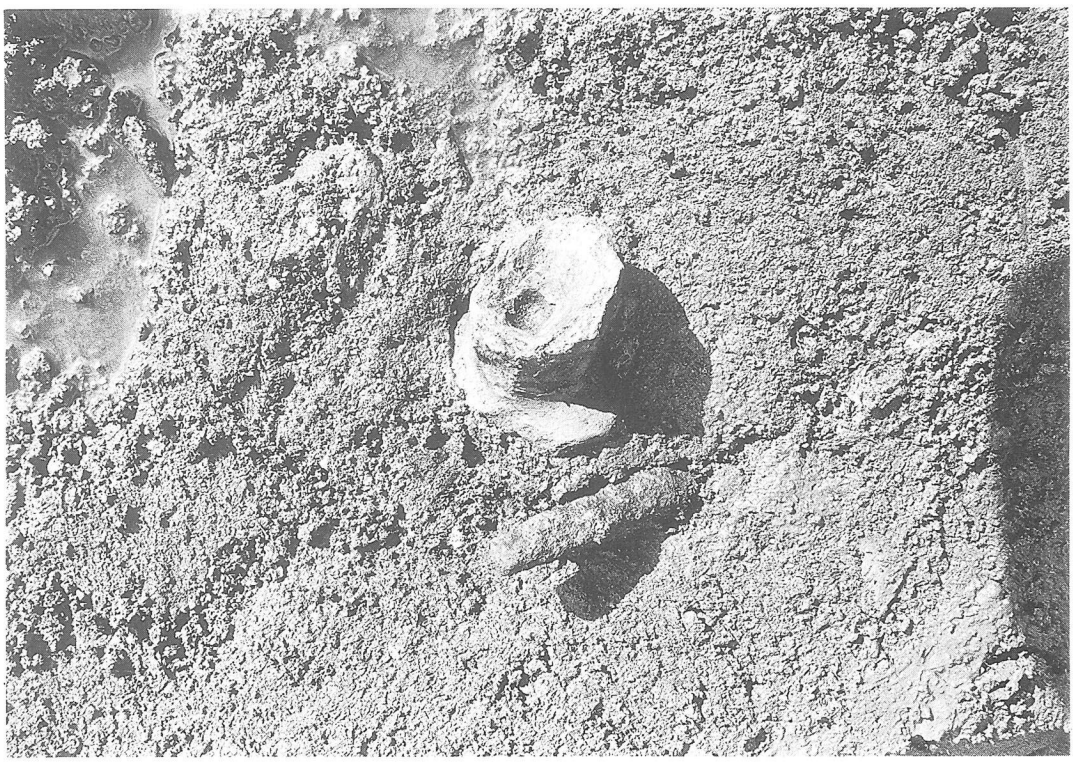
図版 1

発掘調査地近景(東から)



グリッド調査状況

遺物出土状況

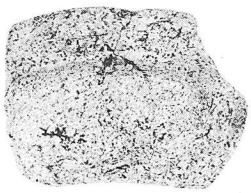


高坏・刀子出土状況

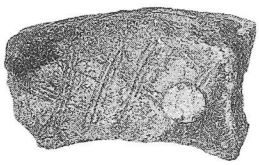
図版 3

4-1

4-2

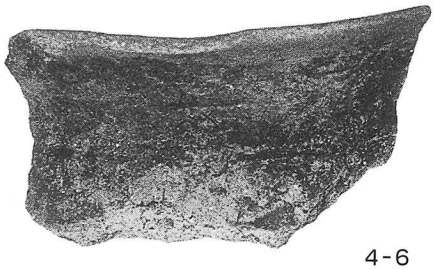


4-3

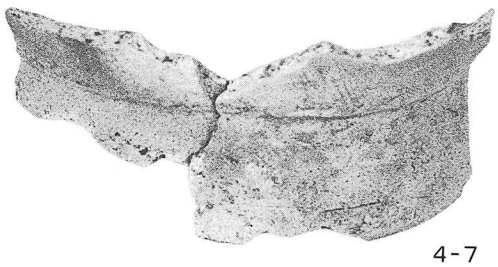


4-4

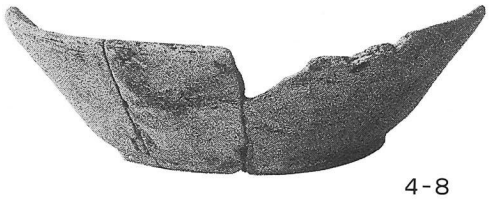
4-5



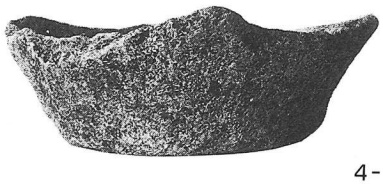
4-6



4-7



4-8



4-9

古志本郷遺跡出土遺物— 1

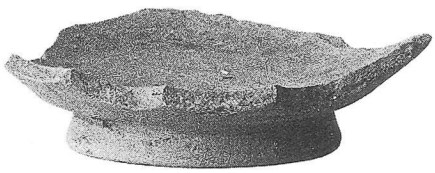
5-1

5-2

5-3

5-4

5-5



5-6

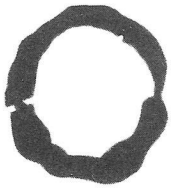
5-7

5-8

5-9

5-10

5-11



6-1

6-2

6-4

6-3

古志本郷遺跡出土遺物—2

角　田　遺　跡

1. 位置と環境

角田（つのでん）遺跡は出雲市上塩冶町揚松に所在する。この一帯は、ＪＲ出雲市駅の南方約500ｍにあり、田園に囲まれた民家や畑が広がっている。遺跡の規模は、南北約350ｍ、東西約100ｍで、表面採集した限りでは、南北に細長い範囲に遺物が散布している。出雲平野のうち、斐伊川から西については、帯状に伸びる微高地が、現在でも、宅地や畑として利用されている。古代においても、この微高地が居住域になっている。この地形は、斐伊川や神戸川の旧自然堤防とよばれるもので、角田遺跡付近は、神戸川がかつて馬木付近から北流していたときに生成された旧自然堤防上に位置している。角田遺跡の南には、大集落である宮松遺跡が広がっているが、北にはＪＲ出雲市駅の東で遺物の散布が見られるほか、塚山古墳も丘陵から西に離れた位置にあることから、角田遺跡の立地する南北に伸びる旧自然堤防上には、いくつかの遺跡が存在することがわかる。

第１図　角田遺跡周辺の遺跡

１.角田遺跡　２.天神遺跡　３.善行寺遺跡　４.高西遺跡　５.弓原遺跡
６.塩冶小学校付近遺跡　７.神門寺境内廃寺　８.神門寺付近遺跡　９.塚山古墳
10.今市大念寺古墳　11.平家丸城跡　12.久徴園横穴墓　13.下沢遺跡　14.向山城跡
15.下沢会館周辺遺跡　16.上塩冶横穴墓群　17.宮松遺跡　18.上塩冶築山古墳
19.築山遺跡　20.寿昌寺西遺跡　21.寿昌寺遺跡　22.大井谷城跡　23.伝塩冶氏館跡

さらに、約１㎞西には、同じく神戸川によって形成された幅広い旧自然堤防上に、出雲平野を代表する集落遺跡である天神遺跡のほか、高西遺跡、弓原遺跡、塩冶小学校付近遺跡、神門寺付近遺跡などの大規模な遺跡が広がっている。また、その北には、白枝荒神遺跡が同じ旧自然堤防上の先端部にあるが、この付近は、かつて、斐伊川が西流していたころにはその最下流部にあたり、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に記載された「神門水海（かむどのみづうみ）」への流入部に位置している。

また、それらの旧自然堤防にはさまれた地域にも、近年遺跡が確認されている。出雲市駅の西方では、善行寺遺跡が駅南区画整理事業に伴って発見されたほか、出雲市駅構内からも最近遺物が出土しており、善行寺遺跡の調査所見から、遺跡は南北に細長い旧自然堤防上に営まれた可能性が高い。こうしてみると、出雲平野西部の大集落遺跡のほとんどは、神戸川の営力によって形成された旧自然堤防上にあることがわかる。

しかし、出雲平野西部における古い時期の遺跡は、むしろ平野の縁辺にある。縄文時代早期末には、出雲大社付近の北山山麓に菱根遺跡があり、西の砂丘下の上長浜貝塚からは貝塚の下層から当該期の土器や石器が発掘調査により確認されている。また、縄文後・晩期には東の丘陵下の台地に、大集落遺跡である三田谷遺跡が営まれ、出雲大社付近でも大社境内や原山で遺物が出土しているほか、神戸川の旧自然堤防上に営まれた矢野遺跡などで、はじめて平野の中央でも少量ながら遺物が確認されている。

弥生時代になっても、遺跡の規模は小さく、前期の遺跡はほとんどないが、中期後半には矢野遺跡をはじめ、天神遺跡、古志本郷遺跡、田畑遺跡など、出雲平野のみならず、島根県内でも有数の大集落遺跡が出現し、この時期に飛躍的な画期が訪れている。それは、近年、ＪＲ連続立体交差事業に伴う天神遺跡の発掘調査で発見された木製鍬の未製品にみられる、可耕地の拡大に伴った農業生産力の向上であり、それは古墳時代前期まで引き続き発展している。

しかし、古墳時代中期になると、これまでの大集落の姿が消え、遺跡密度もかなり小さくなり、古墳もあまり知られていない。このことは、出雲平野に限らず他地域でも認められるようであり、海面が高くなったことによって可耕地が減り、沖積平野でより標高の高い微高地に移住したことが考えられる。

古墳時代後期になると、平野の東部と南部の丘陵裾部に、突然大古墳が出現し、妙蓮寺山古墳、大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳などが継続的に築造され、松江市南郊の風土記の丘周辺に点在する古墳群の被葬者と拮抗する勢力が存在していたことを窺わせる。位置的にみて、角田遺跡は大念寺古墳と築山古墳のほぼ中間にあるし、遺跡が営まれた時期もほぼ同じ頃であることからみても、これら大古墳の被葬者を支えた民衆の生活の舞台が、古墳の前面に広がっていたことが予想されるが、当該時期の遺物を出土する大集落遺跡は確認されていない。

奈良時代にも、平野に遺跡は点綴するが、角田遺跡付近の塩冶地区では、西方に神門郡家にも比定されている天神遺跡などがあり、また、南には神門寺境内に古代寺院跡、東の丘陵には長者ヶ原廃寺なども存在し、引き続いて出雲平野西部での中核地となっている。

中世には、大廻城（向山城跡）、大井谷城、半分城などが築城され、出雲国守護の塩冶氏累代の地として、出雲国の政治的中心地としてますます繁栄していくが、やがて政治的中心は東部の能義郡広瀬町の冨田（月山城）の地に移っていく。（川上）

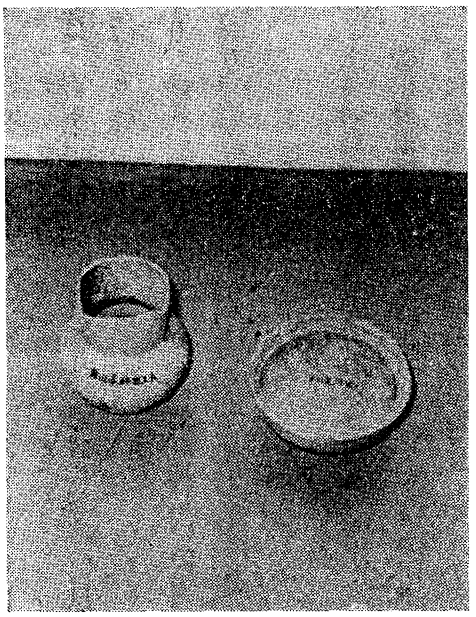
2. 調査に至る経緯

角田遺跡一帯から東の下沢地区は、只谷川の排水が良くなく、農作業には非常な労力を必要とする地域で、かねてより土地改良の必要性を望まれていた地域であった。そのため、揚松第三工区圃場整備事業として着工されたが、1970年（昭和45年）秋に角田で南北方向の水路設置工事の際、出雲高等学校社会部員が現地踏査を行い、水路溝の側壁に露出していた完形の須恵器直口壷のほか、付近に須恵器や土師器の破片がかなり広範囲に散布していることを確認した。

そこで、出雲市土地改良区や出雲市教育委員会に通報するとともに工事を部分的に中断していただき、西尾克己、川上稔を中心に出雲高等学校社会部考古班の生徒、地元の新宮一世紀氏のほか、山野進、石原順、坂本勝、新田容之が協力して、緊急に出土品等を採集し、その地点や状況を記録することにした。

その期間は、昭和45年11月18日から20日までの３日間にわたって実施し、遺物が集中していたＡ区では、土師器の坏３個体や、須恵器の直口壷、坏蓋などの比較的残りの良い遺物が、墓壙の上面に置かれた状態で発見された。また、Ｂ区では、高坏などが出土したほか、水路部分の南北200ｍ以上にわたって遺物の散布が確認されていることから、かなり広範囲にわたる遺跡と考えられる。

調査は、遺物をとりあげ、遺構の測量などを行ったのち、水路工事を再開し、揚松第三工区圃場整備事業は完工している。（川上・西尾）



揚松第三工区土器発掘

・土器の発見

当工区の角田大井谷付近一帯は遠く奈良朝時代より人家があった場所であり、何か当時の集落のあとがあるのではないかと考えられていたが、昭和四十五年秋出雲高校の生徒の手によって前頁写真の如き弥生式の土器が発掘された事はこの事を裏付けるものである。なお調査をすればこの付近一帯の状況が判明するものと考えられる。

識者の判定によれば三世紀後半か四世紀初頭の土器であるので約一六〇〇年前に人家があった事は確実である。

第２図　「出雲市土地改良区二十年誌」掲載記事

3. 遺構と遺物

角田遺跡については、これまで発掘調査が行われたことはなく、遺跡の存在すら知られていなかった。昭和45年秋の調査によってはじめてその一端が明らかになった。調査地は、位置的には東西100m、南北300mの角田遺跡の東端部を南北に伸びる排水路の掘削によって発見され、須恵器や土師器が広く分布していることが確認されている。それらのうち、集中して遺物が発見された地点が2ヵ所あり、そのうちの1ヵ所からは遺構も検出されている。

A 地 点

排水路の西側の道路部分の下、50～70cmに遺物が集中していた。器種は土師器の坏、甕、坩、須恵器の坏蓋、直口壺で、これらの遺物が出土した層は茶褐色土だが、この下には、暗褐色土を掘り込んだ、暗青褐色粘土が充填した南北90cm、東西80cm（推定）、深さ30cmの土坑が検出されている。この土坑は墓壙と考えられるが、土坑の上面から出土した遺物は意図的に置かれたような状態で配置されていた。これら土器群のうち最初に発見された土器は、土器群の東側にある須恵器の直口壺で、頸部を南に向け倒れた状態で出土している。その下には、10×20cmの矩形の割石があり、土器がその上に置かれたようになっていた。さらに、その30cm西には、やや扁平な割石のうえから土師器の甕の口縁部が出土しており、なんらかの意味があったと考えられる。この土器の南北方向には、すぐ北に土師器の完形の坏が、土坑上面の直上で出土したほか、さらに10cmその北には、土坑上面から15cm浮いた状態で、半分欠けた同形態の坏が発見されている。そして、その坏の20cm東にも、半分欠けた同形態の坏があり、3個体の坏がかなり近接して置かれている。また、南側には、土師器の坩と須恵器の坏蓋も、土坑上面や、やや浮いた状態で出土している。こうしてみると、少なくとも7個体の土師器や須恵器が供献されていたと考えられ、しかもそのうちの2個体は、割石の上に置かれていたことになる。この土坑の中の粘土からは、炭化物小片のほか、土器片も少量出土しているが、土坑のすぐ周りからは、遺物は出土していない。

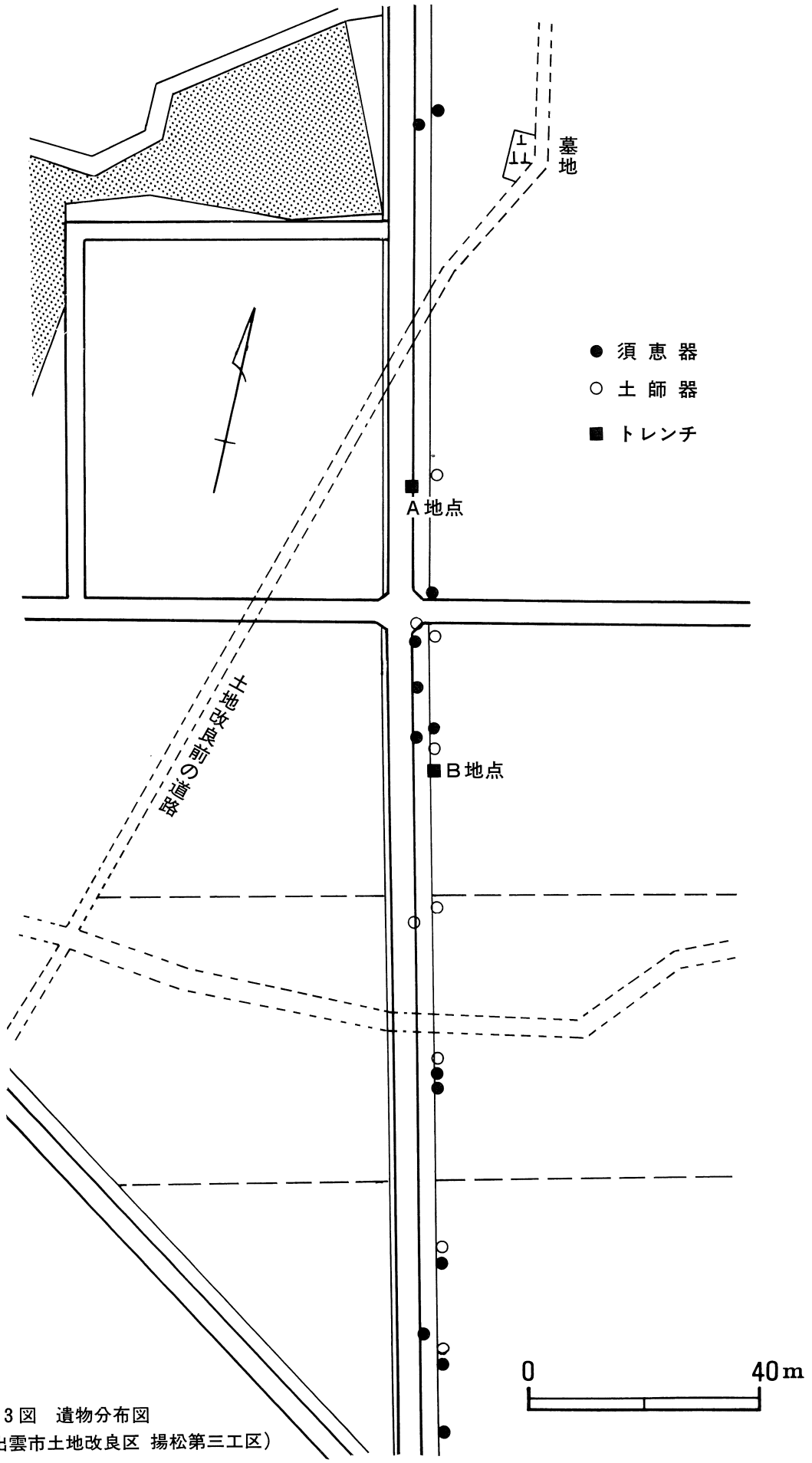
なお、A地点の周辺からは、竈の破片や甑の把手も出土しており、すぐ近くに集落があったことを示している。

B 地 点

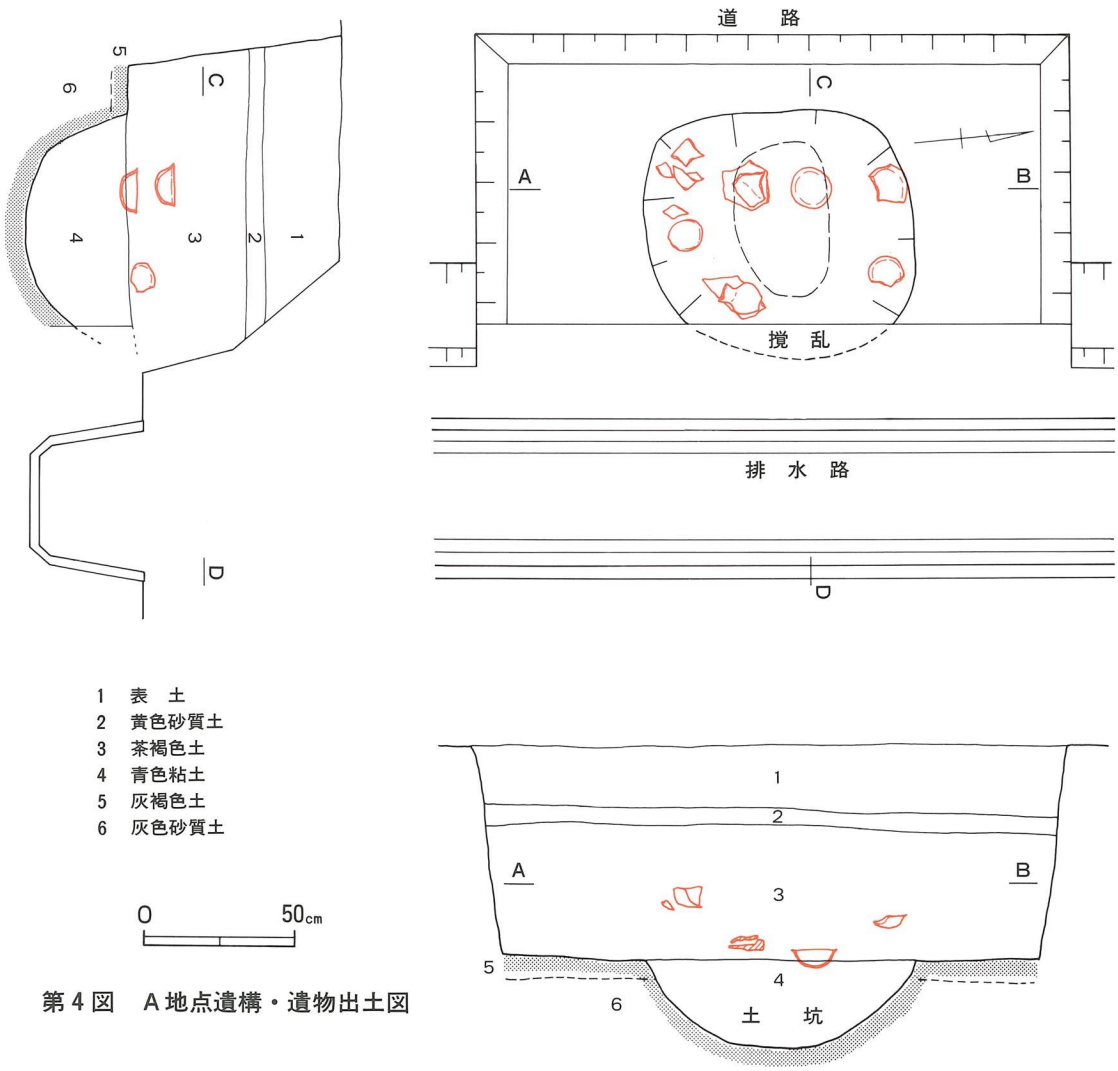
遺構は検出されていないが、排水路の東側から土器がやや集中して出土している。ほとんどは土師器で、高坏、甕のほか、竈の一部も出土している。壺の口縁部を中心として、破片が多量に散乱していたが、胴部の小片が多い。また、その東側に少し離れて、脚部を上向きにした高坏や坏部を欠いた高坏などが出土している。特に、出土状態において規則性はなく、A地点と同じく、遺物包含層である茶褐色土から出土している。

A地点出土遺物（第5図土師器、第6図須恵器）

A地点で出土した遺物としては、坏（5－1、2、3）がある。3個体とも、形態的にはほぼ同じで、このうち1個体は完形品である。1は、口径13.5cm、高さ5cmの完形品で、外面は全体的にハケメ調整し、底部付近はヘラケズリののち粗いハケメを施している。口縁部が緩く外反しているが、内面口唇部の1cm下には屈折した段を持つ。内外面ともに赤色塗彩をしており、器形的には類例の少な



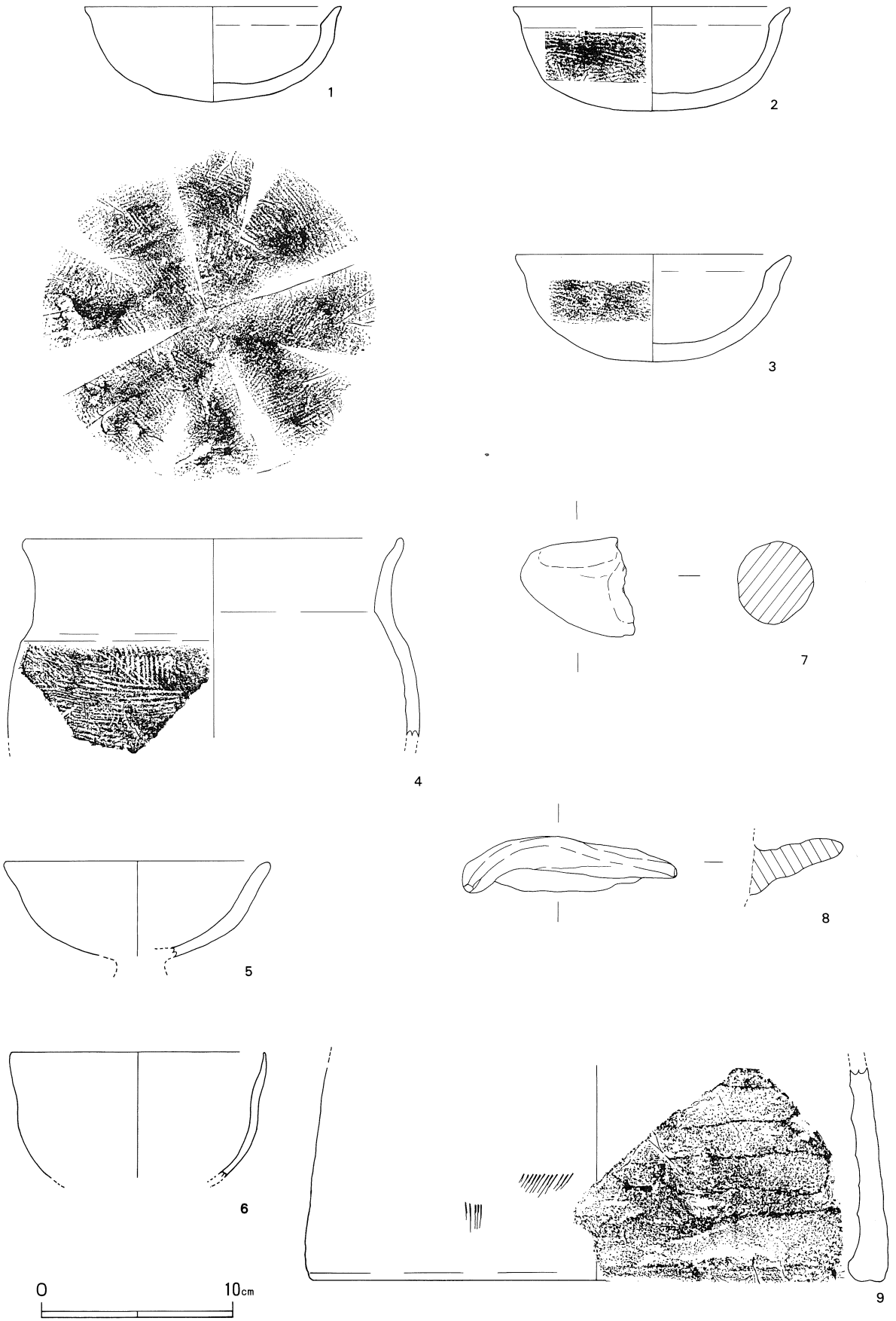
第3図　遺物分布図
（出雲市土地改良区 揚松第三工区）



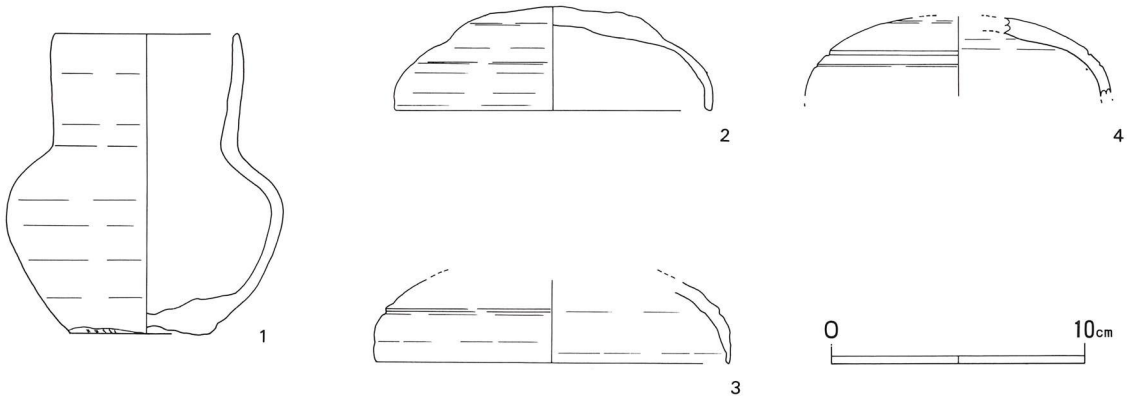
第４図　Ａ地点遺構・遺物出土図

い土器である。２は、口径14.5cm、高さ5.5cmで⅓を欠いているが、形態、調整も同じで、赤色塗彩されている。３も、高さがやや低いことと外面口縁部の外反がやや強い点を除けば、基本的には１、２とほぼ同様である。甕（５－４）は、口径20cmで胴部のあまり張らない器形である。口縁部はヨコナデ、頸部以下はタテ方向のハケメののち、斜方向、ヨコ方向の粗いハケメを重ねて調整している。内面は、頸部から下にヘラケズリを施している。高坏（５－５）は、脚部と接合部を欠くもので、口径は14cm（推定）、坏部の高さ５cmのやや小さな土器で、立ち上がりは緩く、口縁部がやや外反する。外面を赤色塗彩しているが、内面は磨滅しているため不明である。坩（５－６）は胎土の良い土器で、底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部の下３cmのところで少しすぼまったのち薄手の口縁にいたるものである。表面は磨滅しているため、調整などは不明である。これら土器の他にも遺物は確認されている。甑（５－７）は、把手の一部が確認されただけである。竈の一部と考えられる遺物も２点出土し、庇部（５－８）は竈の本体から剝離した幅１～1.5cm、長さ５cmの突出部で、上部のコーナー付近の一部である。竈の底部（５－９）は、底部の口径は30cmの小さなものであり、おそらく持ち運びができるような土器であったと考えられる。この竈の内面には、２cm程度のヨコ方向のケズリが入っている。

また、須恵器も何点か出土しているが、直口壺（６－１）は、土壙上面の直上の割石の上で発見されたものであるが、口径７cm、高さ12cmの平底のほぼ完形品であるが、底部付近にヘラケズリが認め

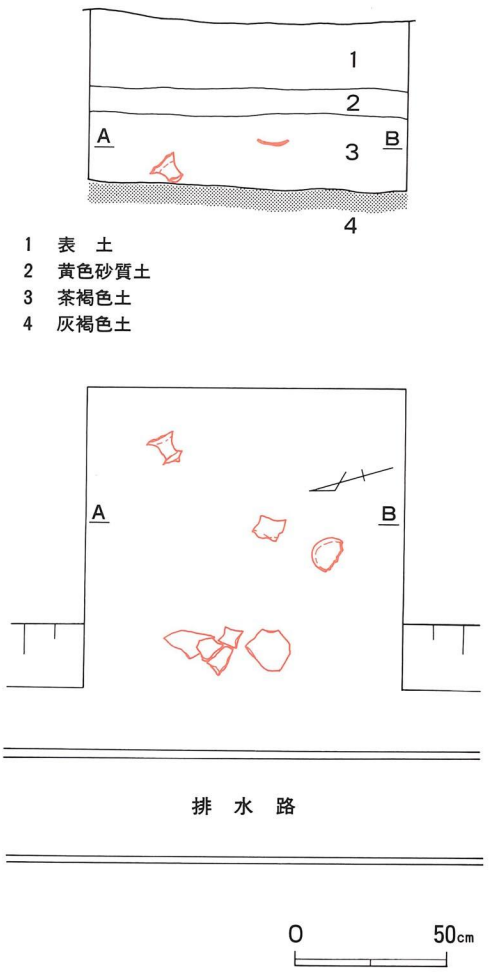


第5図　A地点遺物実測図(1)



第６図　Ａ地点遺物実測図(2)

られる。また、坏蓋も３点出土しているが、そのうち６－２は、比較的残りのいいもので、口径12cm高さ４cmのものである。体部の上部に緩やかなカーブの段差はあるものの、沈線は認められず、端部も丸く仕上げている。６－３は、端部付近の坏蓋の破片だが、一条の沈線で段差を作っている。天井部は欠けており、調整は不明である。６－４は、幅２㎜と１㎜の２条の沈線で突帯を作り出しているが、天井部を欠いており、調整は不明である。

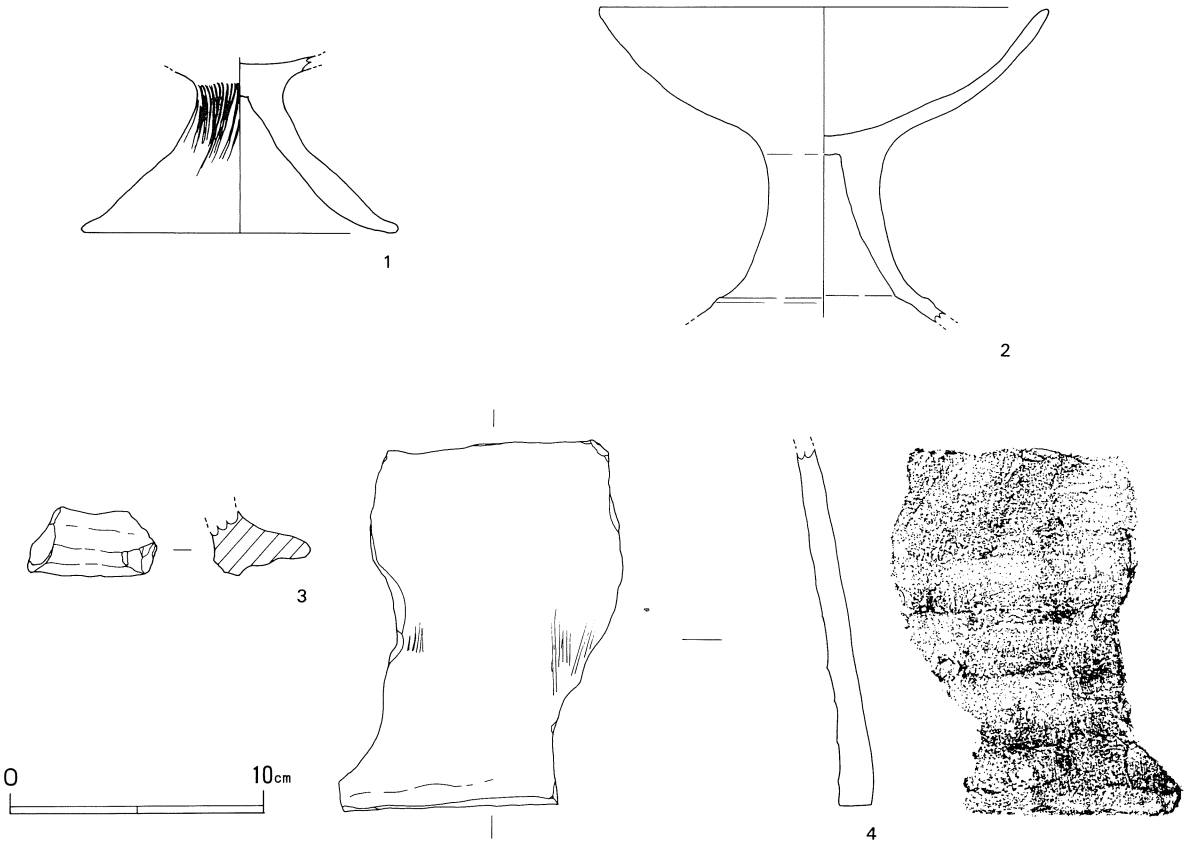


第７図　Ｂ地点遺物出土図

Ｂ地点出土遺物(第８図)

Ｂ地点から出土した遺物はほとんどが土師器で、須恵器は破片が１点確認されただけである。

高坏（８－１）は、坏部を欠いた脚部のみが出土している。外面は、接合部から緩やかに大きく脚端部に向かって広がり、接合部から脚上半部にタテ方向のハケメ調整をしている。また、脚の内外面のほか、坏部内面にも赤色塗彩を施している。高坏（８－２）は、１よりかなり脚部の立ち上がりが急であるが、下半部に屈曲した段をもつ。坏部は別の破片になっていたが、接合部から口縁にかけて緩やかにカーブを描くようにして立ち上がる。表面が磨滅した部分が多いが、赤色に塗彩してはいないようである。竈（８－３、４）は同一個体のものかどうかわからないが、庇部（８－３）と底部（８－４）が出土している。Ａ地点で出土したものよりも、やや薄手のものであり、大きさも小さく、持ち運びのできるものであったと考えられる。（川上）



第 8 図　B 地点遺物実測図

4. ま と め

今回の報告は、1970年（昭和45年）、土地改良に伴って調査を行った角田遺跡の概要である。調査後25年の歳月が経過し、記録としては十分とはいえないため、今回概要をまとめたものである。

現在の集落の東端部を南北に流れる排水路を掘削したときに遺物が出土している。これらは、角田遺跡（南北約350m、東西約100m）の範囲に含まれるが、遺跡は神戸川の旧自然堤防上に立地しており、出雲平野西部での典型的な集落立地といえる。遺跡の規模としては、周辺の集落遺跡と比べると、小規模である。

検出した遺構は、A地点で認められた土坑のみである。径80cm、深さ30cmほどの小さな土坑であるが、土坑上面からは土器が集中して出土している。土師器が多く、坏3個体のほか甕、坩があり、須恵器では、直口壷、坏蓋がある。これらが、意識的に置かれたようにして出土し、さらに、土師器のうち、坏3個体は内外面に赤色塗彩を施し、位置的にも近接して置かれていたことからみても、供献された土器群と考えられ、この土坑も墓壙の可能性が高いが、乳児か小児、あるいは再葬かは、骨が残っておらず、明らかにし得ない。時期は、須恵器の蓋の山陰須恵器編年Ⅳ期[注(1)]に該当し、7世紀初頭と考えられ、須恵器と土師器の共伴関係を示す好資料といえる。また、調査による限りでは、出土遺物からみて、角田遺跡がほぼ古墳時代後期を中心とする集落遺跡と考えられ、出雲平野西部において、大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳などの大規模な横穴式石室をもつ古墳が次々と築造された時期に近い頃である。また、地理的にみても、角田遺跡は、大念寺古墳と築山古墳、地蔵山古墳のほぼ中間に位置している。

角田遺跡そのものは、塩冶地区付近の遺跡規模としては、どちらかというと小さいが、これら古墳の盟主を支えた人たちの集落として、今後とも目を向けていく必要のある遺跡であり、また、角田遺跡の周辺からは、古墳の規模から見ても、さらに有力な当該時期の遺跡が発見される可能性が十分に考えられる。（川上・西尾）

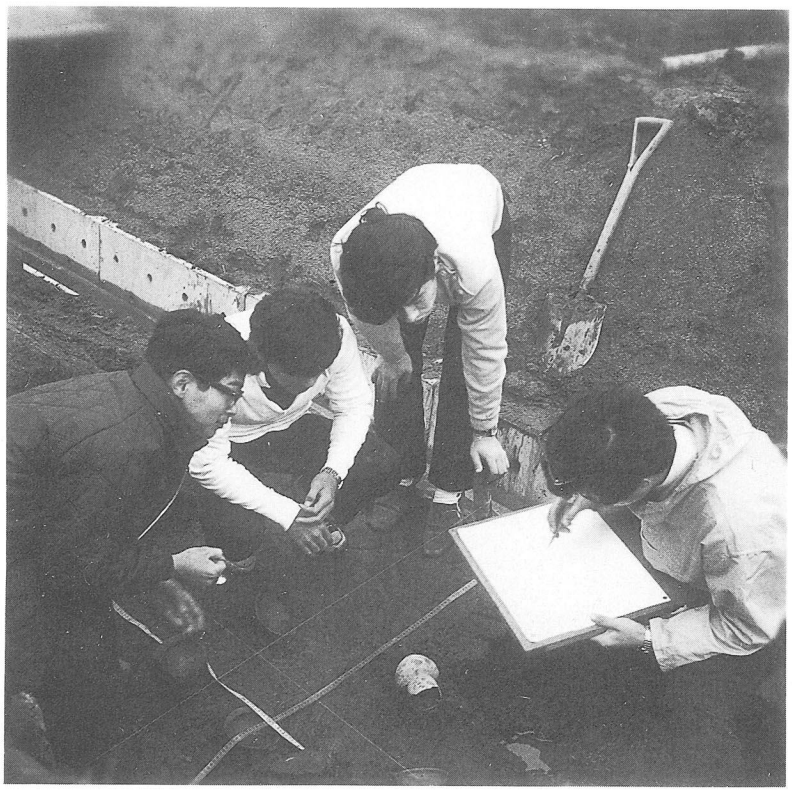
注(1)　山本　清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』（1971）

角田遺跡現況(遠景—東から)

角田遺跡現況(近景—南から)

図版 2

調査状況（A 地点）



調査状況（A 地点）

遺物出土状況（A地点）

遺物出土状況（B地点）

図版 4

5-1

5-2

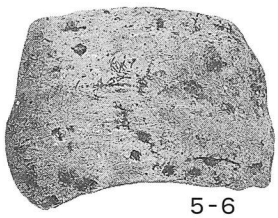
5-3

6-1

6-2

5-8

5-5



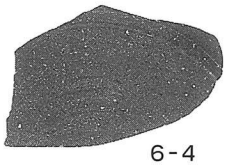
5-6

5-7

5-9

5-4

6-3



6-4

A 地点出土遺物

8-1

8-2

8-3

8-4

B地点出土遺物

平成７年(1995) ３月20日　印刷
平成７年(1995) ３月24日　発行

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第５集

発行　　出雲市教育委員会
印刷　　㈲ナガサコ印刷